

書評

長田俊樹『インダス文明の謎 ―古代文明神話を見直す―』

京都：京都大学学術出版会 学術選書 064、2013 年、xxi+323 ページ、1800 円＋税、ISBN 978-4-87698-864-8

小西正捷

著者長田氏は2003年ころ、京都の総合地球環境学研究所（以下、「地球研」）内に総合的な研究プロジェクト「環境変化とインダス文明」の立ち上げを企て、インダス文明に関する大きなテーマへの取り組みを開始した。まず氏は、研究の基本的資料・基礎となる2冊、すなわち研究史と詳細な文献目録からなる〔長田編 2005〕と、考古学が明らかにするインダス文明像のほぼ全容の概説に加えた遺跡の詳細なダイレクトリー、すなわちインド96遺跡、パキスタン47遺跡、アフガニスタン4遺跡、計147遺跡を網羅した総論〔上杉2010〕を刊行した。ともに文字通りの労作であるこれらの基礎資料は、今後の研究上、きわめて利用価値の高いものである。

こうして長田氏をリーダーとする「インダス・プロジェクト」は、地球研の研究費を得て、2007年から5年間の計画で立ち上がった。長田氏のもとに約40人が集まったとされる研究者の専攻領域を見ると、考古学・言語学をはじめ、地理学・地形学・地質学・地球科学・動植物学・古気候学・GIS、さらには文学・インド学・ヴェーダ学等、きわめて多岐にわたっていることに、まずは驚かされる。これだけの規模で、かつ多方面から総合的にインダス文明を研究しようとする試みは実に珍しいことであり、そのユニークな手法と研究結果が大いに期待されるところであった。書評の対象である本書の方はその成果を一般向けに分かりやすく概述したものであるが、それを補完するものとして、メンバーのうちの29人が執筆した論集〔長田編 2013〕が、これとほぼ同時に刊行されている。プロジェクトの終了が2012年であることを考えると、そのまとめの速さにも、長田氏の強いリーダーシップがうかがえる。

とはいえ、40人かそれ以上とされる研究分担者のうち、プロジェクトの一応のまとめとしての同論集に研究成果を発表したのが29人というのはやや寂しく、他のメンバーがこの期間、どのような貢献をしたのかは詳らかでない。インダス・プロジェクトからは、年次ごとの『成果報

告書』と『ニュースレター』が折にふれ刊行され、各人からの研究活動報告が盛られているようであるが、部外者である評者の手元にはバックナンバーがそろっていない。そのため、いまは一応の最終報告書である〔長田編 2013〕のみに則して、このプロジェクトの成果を見るほかはない。

さて、同書を見る限り、そこに成果を提出された方々のなかにあっても、このプロジェクトにどれだけ具体的に貢献できたのだろうかと首をかしげさせられる人選やテーマ設定が見られる。問題の焦点であるはずの、文明の起源と終末、アーリヤ問題、乾燥化、河川の流路の変更など、今後も議論の余地があるものならばともかく（それでもなお、研究史を紐解けばすでに決着済みであるこれらの問題の多くを、あらためていまなお古い「神話」と呼び、「謎」とするのは理解しがたい）、現代における言語・民族の分布など、議論の余地もほとんどないような教科書的「事実」、すなわち新しみのない事項の羅列のような「成果」も見られる。「インダス文明」を総合的にとらえるためには、たとえ繰り返しになっても、このような「事実」を確認し続けていかねばならないのだろうか。ただし、これまであまりこのような議論の場に上がることが少なかった自然科学諸分野、ことに自然地理学や地形学、古気候学、農学などからのいくつかの研究成果には、素人目にはやや難解な部分があったにせよ、わくわくするような興奮を覚えた。

一方、本来このような文明研究の中心を担うべき考古学専攻の研究者層が、このプロジェクトではきわめて薄いことがめだつ。当プロジェクトの最大成果であるカーンメールとファルマナーほかの発掘報告書〔Kharakwal et al. (ed.) 2011; Shinde et al. (ed.) 2012〕はインド側のカウンターパートの主導によってまとめられているし、主たる執筆者も、同上の各巻の編者を中心としたものではあるが、遺物に関しては、前者は上杉彰紀が、後者でも（GIS考古学者による報文を別にすれば）、ここでも独り上杉が詳しい遺物の諸章を書いているのみである。しかし、どういうわけか上杉自身はこの〔長田編 2013〕には執筆しておらず、この巻で唯一、考古遺物の検討をしているのは遠藤仁のみである。

むしろ注目すべきは、刊行のいきさつがやや不明であるが、J・M・ケノイヤーの指導のもとに学位論文をまとめたランドール・ローの〔Law 2011〕が、優に800ページを超す同論文をこのインダス・プロジェクト

から刊行していることである。この論文は、インダス文明遺跡から出土した5万6350個もの貴石類を分析してその産地を逐一探り、実際に各地にも足を運んでその同定を確かめた。それによって各鉱物別の産地・加工地・使用地、その流通経路等が詳細に明らかにされ、ひいてはインダス文明のよってきたネットワークの実態を図示することに成功している。彼の研究のインダス・プロジェクトへの貢献は著しく、たとえ彼が同プロジェクトの正規メンバーでなかったとしても、この論文がインダス・プロジェクトの予算を割いて刊行されたことを喜ぶたい。

なお、さらに付け加えるならば、[長田編 2013]にしても、同年刊の概説書にしても、编者自身の専門である言語学、あるいはムンダ言語文化をはじめとするオーストロアジア語群研究をふまえた議論がほとんどなされていないのは不可解である。ただ、辛うじて[長田編 2013]には、「インダス文字」は文字ではなく単なる記号であったとするファーマーの大変刺激的な近年の新説が児玉望によって紹介されていて、もしこれが文字でなかったならば、その「解説」も、その結果による文明の新たな理解・情報を期待することもまったく意味を失うことになるため、この問題には決着をつけてほしい。

以上、地球研の「インダス・プロジェクト」を巡ってその展開を紹介してきたが、ここからは本題の、書評の対象である『インダス文明の謎』についての簡単な紹介・書評に移ろう。まずは本書が、インダス文明に関する、日本人による久々の単著として刊行されたことを喜ぶたい。振り返れば、[マッカー 1934]と[ウィーラー 1966]を除いてインダス文明に関する邦語による単著は少なく、論文としての論考はかなりあっても、単著としては1980年のNHKブックス[辛島他 1980]が、しばらくのあいだ「スタンダード」であった。同書は当時としては最新の情報を盛り、文明の西アジア起源説、アーリヤ人侵入による文明の破壊説などの西欧的なバイアスを退けつつ、総じて文明がのちのインド文化の源流をなすとした視点を提示した。この点は、30余年前のことであるからしてデータ自体はやや古いとしても、揺らぐことがない。そしてようやく近年になって、快著[近藤 2011]が出版されたことはまことに喜ばしい。

従来インダス文明はかなり不明な点（「謎!？」）が多いためもあってか、「四大文明の一つ」などとされながらも、他の古代文明に比して不当に

低く評価されてきたきらいがある。ジャケッタ・ホークスはその著『古代文明史』（評者らによる邦訳で全2巻）中、ただか20ページ余をインダス文明にあてているにすぎず、そのうえ、「エジプトやメソポタミア文明の遺物・遺品はいくつもの博物館の大ギャラリーを埋め尽くすほどであるのに、インダス文明の遺物はすべてコンテナ数個に収まってしまいう」などと考古学者にはあるまじきことを言っている。発掘は宝探しではなく、遺物の研究は、「名品」とされる事物の商品価値を鑑定することではない。インダス文明の本質は、強力な王権に統治された単一・均一の「国家／帝国」ではなく、日用の遺物から明らかにされるように、住民のいたってプラグマティックな経済活動に支えられるものであったろう。

なお、モヘンジョダロなどの家屋の壁が高くそびえて単調、陰気に見えるのは、発掘の鉤が土台の下まで及びすぎているからであり（高い煙突のように見える井戸を見よ）、現状の壁は、実はプランを同じくする新旧複数の建築期の構造からなっている結果である。中庭に面して部屋を四角く連ねた部屋割りや屋敷取りをあまり変えないままに外壁で囲った構造は大家族制の居住形態を思わせ、いまなおそれは、西部一帯の乾燥地帯に保守的に踏襲されているもののように思われる。

いうまでもなく、考古学研究において重要なのは、発掘された遺構・遺物をはじめ、それらが属する「文化」を最も端的に特徴づける土器である。時にはあたかも、地名を冠した土器類がそのまま特定の「文化」そのものであるかのように扱われ、またその図示や同定をめぐる議論があまりにも職人芸的となってしまうことに対する皮肉まじりの批判をこめてか、土器に関しては「まったくの素人」という著者が、「知ったかぶりもよくないので、本書では土器の写真や図面などは一切掲載していない」と胸を張っているのは矢張り問題である。「インダス文明」（ハラッパー式遺物を指標とするならば、むしろそれは「ハラッパー文化」と呼ぶべきであろう）の分布範囲と、その始まりから終わりまでの年代を示しているのは、ことに土器を中心とした遺物のセットであった。こうして、ケノイヤーらはこの文化に属する遺跡の総数を約2600と見積もったが、その分布範囲は研究者によって幅があり、ポセールによれば東西1500キロ・南北1800キロ [Possehl 2002]、近藤は東西1600キロ・南北1400キロ [近藤 2011] などとしている。その数値は当然、遠くにある遺跡のど

れを直線で結ぶかによって異なり、またその文化内容中のハラッパー式遺物と他の文化要素との比率、あるいはインダス文明における各遺跡の果たした役割等が問われてはじめて「インダス文明の遺跡」としての認知を得るかに問題があるからであろう。したがって、まずはこのような辺境の遺跡ごとの吟味が必須である。それなしに、ただ最も遠い遺跡同士の結んで直線距離を測り、その経緯の及ぶ範囲を「インダス文明（あるいは国家／帝国！）の版図」と考えるのは現実的ではない。事実、この範囲中に大きな部分を占めるラージャスターンのタール沙漠一帯には、パキスタンとの国境に近いチョーリスターン地域の他にはほとんど遺跡はなく、ハラッパー文化の分布が濃密に見られる地域にしても、その範囲がすべて一様に均一な「文明」をなし、各遺跡もそのすべてが「都市性」を備えたものではなかっただろう。

年代についても、それが全地域を通じて一様であったはずがない。ハラッパー遺跡を広範囲にわたって地山まで発掘中のケノイヤーは、「前期」ハラッパー文化の年代をラーヴィー文化相（紀元前3700～2800年）とコート・ディジー文化相（前2800～2600年）の2文化相として捉え、続く「盛期」ハラッパー文化をA・B・C期（それぞれ前2600年～、2450年～、2200年～）、さらにその後100年ほどの移行期をはさんで、1800年ころ以降の「後期」ハラッパー文化期を置いた〔Kenoyer 1998〕。この年代が妥当であるかどうかは、基本的にハラッパー遺跡そのものにおいて検証すべきものであり、他の遺跡、まして「インダス文明」全域に該当するものとは言いきれない。むしろこのような年代幅の区切りと設定は、他の地域においても地域ごとに試みられねばならないものである。すなわちインダス文明といっても、それは時代ごとに異なるいくつかのまとまりからなる有機的な地域からなる集合体であり、このことは、「地域文化と地域間交流の様相」を時代別に示した地図と、特定の文化様相の分布を示す地図、さらにはそれに基づいた「インダス地域における文化編年」図を多用した〔上杉2010〕や、他の遺物についてもわかりやすくつくられた〔近藤2011〕のモデル図などによって、見事に示されている。今後も研究は、このように一定の時期と地域に限定しつつ進められるべきであり、たとえば文明末期に見られた様々な事象（河流・気候・地形・交易活動上の変化など）が、いったいどの時期にどの地域で起こったのか、またそれはどの程度まで広範囲に影響を及ぼしたのかなどについ

て慎重に留意する必要がある。

こうしてたとえば、文明期ではあるがやや後期にあたり、彩文土器などに各地方の地方的文化要素との融合を見せ始める東部パンジャブのローバル＝バーラー文化（評者の提唱、1971年）や、ボセールが提唱したグジャラート・サウラーシュトラ半島部のソーラト文化〔Possehl 2002〕などは、さらに時期の下る後ハラッパー諸文化との関係で、もっと注目されてよい。アラビア湾岸との交易活動については評者も1976年に、ある研究集会において「紀元前1975年のグジャラートにおけるインダス文明の解体」というやや挑発的な発表を行い、これがのちの、評者らによるアラビア湾岸発掘のきっかけとなったのだが、この発表は、「夢とロマン」の一言で一蹴されてしまった。ロータルの発見・発掘もあって、大河文明のイメージのみが強かったインダス文明が「海洋文明」でもあったという認識が、ようやく日本の外では、出始めていたころのことである。

このころ評者はまた、アフガニスタンの農村で、カーレーズ（カナート）による地下灌漑や、夏作・冬作物栽培の特徴、天水農耕・灌漑農耕のありかたについて教を乞うており、実際には様々な変化に富むインダス地域では、その気候や地形次第で農業・牧畜の形態が大きく異なることに気が付いていた。すなわち、インダス文明社会は、上流ではある程度天水農耕にも依存し、また下流では、メソポタミアのような灌漑水路の掘削と管理を要する灌漑農耕よりも、むしろ氾濫農耕、すなわち季節的に氾濫する大河が運ぶ、水分を含んだシルトを利用したものではなかったろうかと考えた（1970年）。そしてさらに、さらに小規模ながら、ふだんは乾燥したパローチスターン山地の険峻な谷合でも、季節によっては鉄砲水のように流れる雨水をガバルバンドと呼ばれるルーズで小規模な「ダム」にいったん溜め、水の引いた後のシルト堆積を耕地とした形跡に注目した。このような仕組みは、ホルムズ海峡対岸のオマーンの先史遺跡にも見られる。

こうして一言で「インダス文明」といっても、地形や気候の違い、あるいは年代の違いによって、その実際の文化様相は大きくそれぞれに異なっていた。乾燥化も大河の氾濫も、地殻変動やそれによる川の流路の変更も、さらにはそれによる交易活動あるいは地域間交流のありかたの変動等々も、みな地域や時代によって、大きな違いがあったはずである。

それを一言で「インダス文明」と言ってしまう、何か統一したイメージで括ろうとすることには無理がある。まして消えた大河「サラスヴァティー」問題や「アーリヤ人」を巡る問題を文明の全体像に敷衍して、ともすれば政治問題としかねない動きこそが危険な「神話」であって、それをこそ排除して、純粹に客観的で緻密な考古学的データを蓄積し、分析することが真の「インダス文明」理解につながるであろう。

インダス文明を巡る「謎」はきりもなく広がりを見せ、問題はなお山積している。しかし1968年、先達の曾野寿彦先生が未完の著(1970年)を残して急逝、急遽その後をついで、同年に評者が岩波講座を執筆するが、以来約30年、再び1999年に岩波講座の当該章が改訂するまで、長田氏のいう様々な「謎」を解くべく、評者はこの文明に関わってきた。そしてちょうどそのころ、NHKスペシャル「四大文明 インダス」プロジェクトが始まり、近藤英夫氏の世代に、この問題をバトンタッチすることとなった。それ以降はもはや、この文明については筆を折るつもりでいたのだが、次世代に言い残したこともある。つまり、これもまた単なる「夢とロマン」かもしれないが、さまざまに異なった多様な文化＝暮らしの様式を持つ人々が、どう時代や地域を超えて、真の「文明」の名に値する複合社会のうちに共生・共存しあっていたのか。その様相をこの古代文明のうちにも垣間見ることができるならば、いまのような時代にあってこそ、素晴らしいことのように思うのである。

参考文献

- ウィーラー・R.E.M.、曾野寿彦(訳)、1966、『インダス文明』、みすず書房。
 上杉彰紀、2010、『インダス考古学の展望—インダス文明関連発掘遺跡集成—』、インダスプロジェクト、総合地球環境学研究所(以下、「地球研」またはRIHN)。
 長田俊樹(編)、2005、『インダス文明研究の回顧と展望及び文献目録』、地球研。
 長田俊樹(編)、2013、『インダス—南アジア基層世界を探る—』、京都大学学術出版会。
 辛島昇・桑山正進・小西正捷・山崎元一、1980、『インダス文明—インド文化の源流をなすもの—』、(NHKブックス375)、日本放送出版協会。
 近藤英夫、2011、『インダスの考古学』(世界の考古学18)、同成社。
 小西正捷、1970、岩波講座『世界歴史・古代3』、岩波書店
 小西正捷、1999、岩波講座『世界歴史6、南アジア・東南アジア世界の形成と展開』、岩波書店。
 曾野寿彦・西川幸治、1970、『死者の丘・涅槃の塔』、新潮社。
 マッケー・アーネスト、龍山章真(訳)、1943、『インダス文明—印度史前遺跡の研究—』、晃文社(新版、1984、

『インダス文明の謎』、三喜房佛書林)。

KENOYER, J.M., 1998, *Ancient Cities of Indus Valley Civilization*, Karachi.

KHARAKWAL, J.S., et al. (ed.), 2012, *Excavation at Kanmer 2005-06, 08-09*, RIHN.

LAW, Randall William, 2011, *Inter-Regional Interaction and Urbanism in the Ancient Indus Valley - A Geological Provenience Study of Harappa's Rock and Mineral Assemblage*, RIHN.

POSSEHL, G.L., 2002, *The Indus Civilization: a Contemporary Perspective*, New York.

SHINDE, Vasant et al. (ed.), 2011, *Excavations at Girawad, Dist. Rohtak, Haryana, India, 2006; Excavations at Farmana, Dist. Rohtak, Haryana, India, 2006-08*, RIHN.

こにし まさとし ●立教大学名誉教授